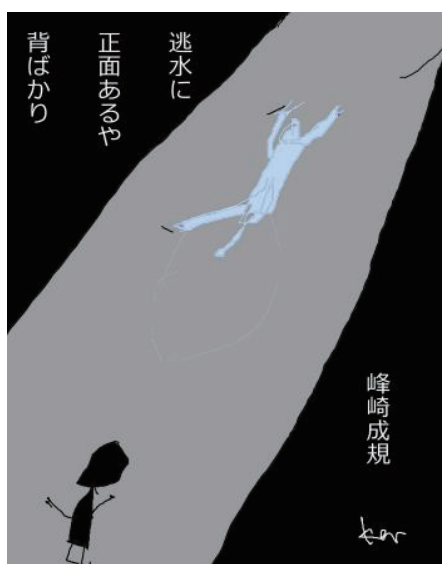


■今月の特選句

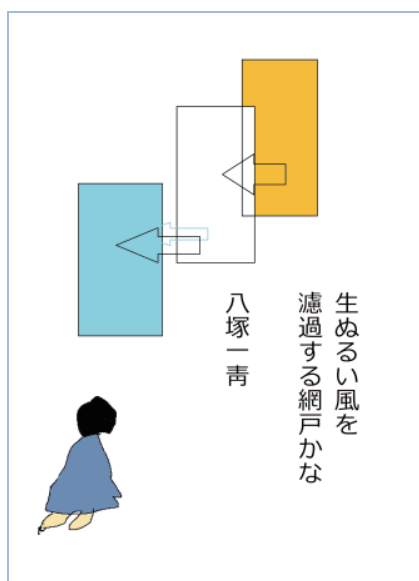
2024年6月



逃水に正面あるや背ばかり

峰崎成規

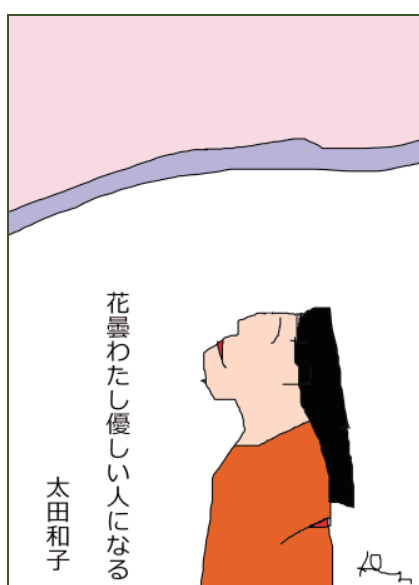
逃げ水を前から見たことはない。逃げ水と言うからには、やはり背面だろう。もし「追いかけれ水」なら、正面ばかりで背中は見れない。



生ぬるい風を濾過する網戸かな

八塚一青

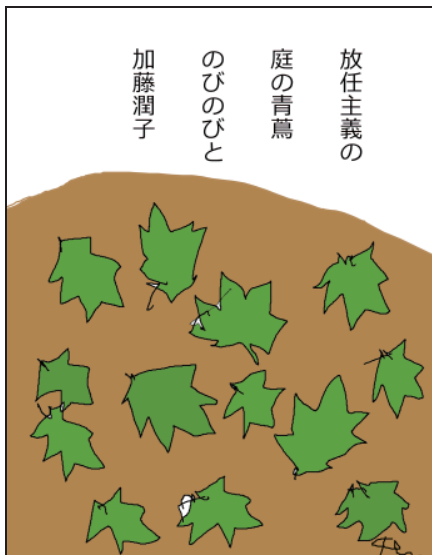
網戸は夏の季語。生ぬるい風を濾過とは新製品を思わせるが、そこは詩の世界。網戸が風を濾過してくれていたとは、まさに新発見である。



花曇わたし優しい人になる

太田和子

花曇りは、花時の曇り空。寒くもなく暑過ぎることもなく過ごしやすい頃である。日射しも弱く景色もぼんやりして見え過ぎないのいいね。



放任主義の庭の青蔦のびのびと

加藤潤子

青蔦の生命力は凄いね。ちょっとよそ見してる間にぐんと成長するからね。庭の青蔦が伸び放題になっている家は、子どもものびのび育っているね。



よく伸びる腕よ蔦へつぎつぎと

浜田イツミ

写生句として良くできている。自分の腕を別人の腕のように客観的に観察しているところがいいね。蔦の生えているところを視野に捉えてもいる。



ガラスコップの影透き通る聖五月

桑田愛子

コップの影が透き通るなんて、一瞬ホントかなと思わせてやはりホントだと納得するまでの時間が楽しい。季語も句の内容によく合っている。

■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

薫風に穴を空けたり航空ショー

・・・見上げる首の筋を傷めて

山下正純

来てたのにもういっちゃってた春どれも

・・・佐保姫様にも挨拶なしに

山本 陽

薫風やいつも遅れて来る男

・・・大物なのかルーズなだけか

長井多可志

日の本と云ふ国ほどの炎暑かな

・・・ひのもとの字は火の元なるや

北熊紀生

思ひ出のひとつところ欠けかたつむり

・・・慌てずのんびり思ひ出しましよ

日根野聖子

縄張りのやうな電線五月雨るる

・・・長方形に空は区切られ

佐野萬里子

母の日やエプロン以外を所望して

・・・エプロンならば父の日にして

井野ひろみ

今日からは家の子猫と言ひ聞かす

・・・三日もすれば威張りだすらむ

敷島鐵嶺

際立てる百合の白さを壺に活か

・・・見ている人の心も真白に

吉川正紀子

雲雀落つ撃ち落とされたかのやうに

・・・少年ゆびで撃つ真似したか

相原共良

水槽の金魚モンローウォークする

・・・魚をたとえばマリリンと呼び

柳 紅生

薫風の天をつんつん花菖蒲

・・・天空ちよつとくすぐつたくて

梅野光子

あご飛ぶや月まで飛んでゆくつもり

・・・あごは魚の飛魚のこと

ほりもとちか

■今月の滑稽句

* 今月の特選句・秀逸句以外の佳句を青字で表示しています。

風はらみどれも肥満や鯉幟	相原共良
大歌舞伎まづ蝶々を舞はせたる	相原共良
四月馬鹿叩けば埃の出る人間	青木輝子
更衣時代遅れの老人ホーム	青木輝子
アバンチュールの恋で了った夏の海	青木輝子
生をうけ紙風船は叩かれる	赤瀬川至安
こつそりと大福食らふ春句会	赤瀬川至安
忠犬と並んで春のくしやみかな	赤瀬川至安
うららかや日に八回のおむつ替え	荒井 類
病室の窓から桜の見えざりき	荒井 類
新紙幣福沢（さわ）から渋沢（さわ）へ夏の川	荒井 類
蛤のいっぱくだけの大欠伸	井口夏子
高望みせぬ藤の花ぶら下がる	井口夏子
リフォームできずででむしのマイホーム	井口夏子
枕上厠上春眠の間も手にスマホ	池田亮二
ジェンダー闘士の乳房恐るべし夏来る	池田亮二
手間賃か粽の値段の半分は	伊藤浩睦
花は葉に葉はビニールに柏餅	伊藤浩睦
葉降る今日も元気だサプリのむ	伊藤浩睦
枝先の先に新緑届きけり	稲葉純子
五月雨に音痴気味かなオカリナも	稲葉純子
咲き始めの躊躇変はらぬ君子蘭	稲葉純子
この花は「知らん」と言ひて紫蘭かな	井野ひろみ
燕の巣一DKの如小さきかな	井野ひろみ
五月雨の水輪にボート浮かびけり	上山美穂
方向指示器の音を弾ませ春の雨	上山美穂
もう少し寝かせておきたい子どもの日	上山美穂
生きるとはお腹すくこと葱坊主	卯之町空
その風は敵か味方か蜂ダンス	卯之町空
万緑の底より聞こゆ死者の声	卯之町空

うららかや親亀子亀首のばす
 雲ひとつ置いて真青な春の空
 男梅雨冥界の父とオンライン
 密林の息か螢のホバリング
 ご長寿の言い訳許され菖蒲酒
 七重八重牡丹桜も思ひ出も
 童心になつて浴びてる花吹雪
 つぎつぎと春ははな色富士は白
 背にのせて五月の汗のかるさかな
 ゴールデンウィーク日当たりの椅子にある
 白鷺を従へ春耕のトラクター
 晴天も黄砂で干せず洗濯物
 八匹もの亀相談会の五月晴
 六甲にぽつんぽつんと山桜
 花の道蝮が居りて通せんぼ
 春愁は一句作れぼうすれけり
 漣(さざなみ)は青雲のごと福田平八郎
 踊らずに生きられまいと一遍さん
 古新聞春塵積もれど捨てられず
 青鳶や伐られし根から涙落つ
 緑蔭にスマホ見る人鳩も寄る
 浅緑生まれて間もない柿若葉
 柏餅食べたらい旨い粒あんこ
 キャッチャーも指三本の松の芯
 白魚の一生妻の一生か
 流水は大きな氷と思ってた
 流水に大小有るは中中だ
 土どけて蚯蚓見つけて土かけて
 青鳶や坊ちゃん列車停車中
 子規堂の路地に咲きたる杜鵑花かな
 御子抱くヨセフのゆびや青嵐
 悶々もなんじやもんじやの毘沙門坂

梅野光子
 梅野光子
 遠藤真太郎
 遠藤真太郎
 遠藤真太郎
 太田和子
 太田和子
 大林和代
 大林和代
 大林和代
 小笠原満喜恵
 小笠原満喜恵
 小笠原満喜恵
 岡本やすし
 岡本やすし
 岡本やすし
 沖枇杷夫
 沖枇杷夫
 沖枇杷夫
 加藤潤子
 加藤潤子
 門屋 定
 門屋 定
 門屋 定
 北熊紀生
 木村 浩
 木村 浩
 工藤泰子
 工藤泰子
 工藤泰子
 くるまや松五郎
 くるまや松五郎

土踏んで桜の景色にたどりつく
 飛行機になつて飛び込むレンゲ田へ
 山々は黄砂に霞みタオル干す
 春の夜カップヌードルの卵の黄
 甲高き声ピンク色のサングラスして
 一帯をモザイク画にして麦の秋
 五月雨や紫陽花の彩きらめかす
 古雛官女の髪に白きもの
 側室の居場所はあらじ雛の段
 ブギウギのリズムに合はせ麦を踏む
 足入れて心ドキドキ春炬燵
 お花見の漫ろ歩きやヨコヨコナナメ
 さくらさくらさくらさくらのこの浮き世
 翔平とすんなり決まる子猫の名
 終身の猫の駅長山笑ふ
 九十の姉妹の会話春惜しむ
 校門へ記念の一步チューリップ
 どこまでも陽炎追うて下校の子
 道案内チラシの裏のマジックペンの
 歩け歩け欠点の一つや二つ
 味方だよカタコトなら通じる紋白蝶
 小町かな花の命は短くて
 満開の桜や本を読む男
 春霞佐保姫何処に居るのやら
 新茶飲むここは清水の骨董屋
 竹婦人貴方任せの寝床かな
 大道芸のガマの油や薬降る
 若者は大望抱くや山笑ふ
 朝寝して優先順位を入れ替える
 目借時崩れてゆきし世界観

黒田恵美子
 黒田恵美子
 黒田恵美子
 桑田愛子
 桑田愛子
 佐野萬里子
 佐野萬里子
 敷島鐵嶺
 敷島鐵嶺
 壽命秀次
 壽命秀次
 壽命秀次
 白井道義
 白井道義
 白井道義
 鈴鹿洋子
 鈴鹿洋子
 鈴鹿洋子
 鈴木和枝
 鈴木和枝
 鈴木和枝
 高須賀溪山
 高須賀溪山
 高須賀溪山
 高田敏男
 高田敏男
 高田敏男
 田中 勇
 田中 勇
 田中 勇

リモコンの行方不明や夏来る

遠雷や白湯で飲みたき下痢薬

豚足にむしやぶり付ひて夏始

弁当は彼の手作り花見行く

更衣セーラー服の白は綺羅

若楓和菓子も旨し美術館

花筵これで最後と酒を酌み

疑ひを真顔で返す四月馬鹿

世情より日々の営み鳥帰る

麗らかな声を響かせ嗽かな

生方さんのお声懐かし都忘れ

どこにでも引っ越しましょうみどりの日

傍流の父祖の家系図柏餅

捨てられぬものにプライド春逝けり

母の日の肩叩き券倍増に

文字摺草の様に点滴義母癒す

豆ごはん孫のおかわり三杯目

臨月のお腹で見上げ鯉のぼり

一日中アルバムながめ母の日は

遠距離はカーナビまかせ五月晴

新緑の襷を幾重にお城山

人もまた絶滅危惧種燕の子

武者幟たれ憚らぬ子煩惱

黄金週間溜まった仕事片付ける

残業代はらって新人歓迎会

渋滞で目当の地ビール飲みそびれ

亀鳴くや進学は東京「の」大学へ

老鶯にいよいよ弾む万歩計

田中やすあき

田中やすあき

田中やすあき

谷本 宴

谷本 宴

谷本 宴

月城花風

月城花風

月城花風

土屋泰山

土屋泰山

土屋泰山

長井多可志

長井多可志

長井知則

長井知則

長井知則

永易しのぶ

永易しのぶ

永易しのぶ

西野周次

西野周次

西野周次

花岡直樹

花岡直樹

花岡直樹

浜田イツミ

浜田イツミ

魂遊ぶヒトツバタゴの白き闇

金剛杖頼りの米寿夏遍路

A Iに問う句の心薄暑光

鶯は経読む鳥かほう法華経

吟行てふ俳句の虫も出でにけり

もつれ蝶神の御前憚らず

五人から七人家族えんど豆

燕つばめ五月の風と雨が好き

青時雨緑の空間駆けぬける

怖いやら鬱陶しいやら梅雨の雷

夕焼や空いっぱいを舞台とし

都草あつかんべえをしてるやん

女（め）の子より男（お）の子泣き虫笹粽

風食みて筋骨育つ鯉幟

成就なき絵馬の背後の梅実る

通るなら通ってみろやと今年竹

ドライアイそよとも吹かぬ鯉幟

満室と張り紙のある燕の巣

だんまりのまんま丸刈り万愚節

X線おぼろの胸をばらばらに

駝鳥とて二足歩行や吉里吉里忌

風光る八十路と言へど光るもの

春眠やねむれる子らは良く育つ

歓喜せん年に一度の花吹雪

火傷して炊いた筍値打ちもの

亀鳴くやついつい覗く空の壺

ゼロビール飲むや本物もう飲めず

その縞は海の色なり初鯉

食ひ物に不自由は無し穀象虫

憲法九条といふ季語歳時記に

浜田京子

浜田京子

浜田京子

久松久子

久松久子

久松久子

日根野聖子

日根野聖子

細川岩男

細川岩男

細川岩男

ほりもとちか

ほりもとちか

峰崎成規

峰崎成規

明神正道

明神正道

明神正道

棕本望生

棕本望生

棕本望生

村松道夫

村松道夫

村松道夫

森岡香代子

森岡香代子

森岡香代子

八木 健

八木 健

八木 健

校帽にてんとう虫の徽章（きしょう）かな
ふいと手を合わせたくなる水芭蕉
踊とも言へず仮装の好きらしく
ががんぼの玻璃戸に地団駄踏むやうに
花屑と戯れ歌ふつむじ風
白玉の小さき一つをつまみ食ひ
二重虹呑み込む嬰（えい）の大あくび
葉桜や時の栄華の過去となり
花筏栄華の過去を映し込み
蝶にもうご縁がなくて隅っこに
書き損い五枚春の真ん中で
薫風や「新」の犇めく朝の市
この気候三寒四温はいつのこと
連休や父と息子を居酒屋に
遠景は忽那諸島や夏の海
とびあがる噴水夏を待ちかねて
太文字の名札目立たせカーネーション
令和にも家事はをなごよ柿の花
鈴蘭や重荷下ろせど悲しくて
一心にお尻突き出し菊根分け
地震無情花の盛りはなほ無情
窓を開け花ざんまいの句会かな

八塚一青
八塚一青
柳 紅生
柳 紅生
柳村光寛
柳村光寛
柳村光寛
山下正純
山下正純
山本 賜
山本 賜
横山洋子
横山洋子
横山洋子
吉川正紀子
吉川正紀子
渡部美香
渡部美香
渡部美香
和田のり子
和田のり子
和田のり子